船の旅化粧

後藤　明

1. 船の旅化粧

天地の 初めの時ゆ 天の川 い向ひ居りて 一年に ふたたび逢はぬ 妻恋ひに 物思ふ人 天の川 安の川原の あり通ふ 出の渡りに そほ舟の 艫にも舳にも 舟装ひ ま楫しじ貫き 旗すすき 本葉もそよに 秋風の 吹きくる宵に 天の川 白波しのぎ 落ちたぎつ 早瀬渡りて 若草の 妻を巻かむと 大船の 思ひ頼みて 漕ぎ来らむ その夫の子が あらたまの 年の緒長く 思ひ来し 恋尽すらむ 七月の 七日の宵は 我れも悲しも（10巻 2089）

この万葉集の長歌は朱色の船（そほ舟）の舳先と艫に飾りを付けて、年に一度の逢瀬に向かう様を描いている。船に装飾を施すのは航海安全という目的だけではなく、相手のまなざしを意識して、船自体をいわば化粧をすることである。同様に「・・・さしむかふ鹿島の崎にさ丹塗りの小船をまけて玉まきの小梶ししぬき」（9巻）など何カ所かに朱塗りの船という表現は出てくる。

民族学者の西村真次は『萬葉集の文化史的研究』（1936）の中で、船に言及した歌にふれ論じている。万葉集にはしばしば「大船の思ひたのみて」という表現があり、それは海で囲まれた国に住む人々が堅固な船への信頼の気持ちを表したものである。同様に琉球の『おもろさうし』、とくに13巻には船と大君の権威とが密接に結びついていた、あるいは大君の治世を大船にたとえて栄華を賛美する表現が頻出する。

海の民にとっての旅とは船に乗り海を越えることが一般的であろう。その目的に使われる船はしばしば外洋に長期的に出ることが多いであろう。しかがって旅用の船は構造的に複雑堅固で、またサイズは大型であることが多いであろう。エンジン動力導入以前には、そのような船は風で運航することが一般的で帆を備えることが多かったであろう。

さて本稿では旅に使われる船が装飾される度合いが高いことに注目したい。それは異文化集団に自分たちを確認させるあるいは誇示する意図があったと思われる。あるいは戦闘用の船であれば敵を威嚇する目的で船は装飾されたであろう。そのような旅用の船の「化粧」について以下、南太平洋の民族事例を中心に見ていきたい。

2. 南太平洋の事例

2.1. 鰐の舳先をもカヌー：ショーテン諸島

ニューギニア島北岸のセピック川やその河口周辺の海岸、および離島では鰐が象られた舳先をもつ船が特徴である。その一つ、ニューギニア島北東海上に位置するショーテン（Schouten）諸島のカヌーが沖縄海洋博公園の海洋文化館と南山大学人類学博物館に展示されている。海洋文化館の資料は交易用と記録がある（後藤・石村 印刷中）。その特徴は舳先と艫に鰐が彫られ、また浮き木（アウトリガーの浮き）もしばしば鰐型に彫刻ないし彩色されている点である（写真1）。

この地を調査したイギリスのイアン・ホグビンによると、丸木を彫るのは若衆に任されている。丸木がおおむね彫り上がるとカヌーは火であぶられた後、塩水につけられ全体をこすられる。このとき呪術的な効果があると思われるダンスと歌が披露される。次の段階は舳先と艫の彫刻を仕上げること

であるが、この作業はベテランの長老にゆだねられる。長老はまた内部の最後の仕上げも行う。この作業の仕上げには精霊の夫婦の伝承に因んで、夫が妻に言った「目がきれいになるように、目が輝くように」という言葉が掛けられる。同時に彫刻についた煤がこすり取られる。これはカヌーが目的地までまっすぐ進むという願いが込められている。

造形が完成させられ船体の横にデザインが施される。これが行われる前に呪術が施される。造形や専門家によって造られ、船体に浅いレリーフを施すときは専門家の指導で村人が行う。模様は幾何学的だが、それが象徴しているものによって呼ばれる。この模様の起源を神話では最初の男性が旅に出るとき不貞をはたらかないように妻の体に彫った入れ墨の模様だと語られる（Hogbin 1935）。

さてインドネシアからニューギニアにかけて鰐が生息するが、鰐は創世神話における水界の神ないし精霊という位置づけがなされる（Bühler 1961）。また鰐はそのどう猛さゆえ、この地に見られる首狩りのシンボルともなる（Newton 1971）。インドネシア・ボルネオ島のダヤク族では鰐が猿を加えた舳先をもった川舟は首狩り用であると言われている。このカヌーは鰐が口を開けて二股状を呈し、東南アジアからオセアニアに広く見られる二股舳先の船の原型的意味を暗示する。

2.2. 海鳥を象る舳先：ミクロネシアの航海カヌー

ミクロネシアは今日まで伝統航海術がのこるほぼ唯一の地域である。名誉ある航海士にとって鳥は重要だった。まず航海の決め手になるもっとも重要な星座は鳥の名前で呼ばれた。鳥は空を支配するだけではなく、アウトリガーを装着したカヌー自体も翼を広げた鳥に似ているし、航海士は自らを鳥に比定したとも思われる（写真 2）。航海カヌーは交易、とくに西方のヤップ帝国への朝貢のために使われた。

2009 年万葉古代学研究所に招待したカロリン諸島プルワット島の航海士、マニー・シカウ氏によると、プルワットでは空の東には鳳が住むという。それは航海時、東の目印になるアルタイル星である。北緯 8 度付近に存在するプルワット島では、アルタイルはほぼ真東から昇る。東西に航海することが一般的なカロリン諸島方面では、真東と真西の指標となるアルタイルがもっとも重要で、したがってそれが象徴する鳳座が天空を支配するという観念につながるわけである。

同様に多くの島で航海の目標になる星を鳥にたとえる。ポリネシア飛地のアヌタ島ではそれはシリウス、カノープスおよびプロキオンである。ヌクマヌ島ではシリウスをそのように認識する。

さて実際に航海士は種々の鳥の生態を熟知する。すなわち鳥は種類によって陸から離れて飛ぶ距離が異なる。海で見る鳥の種類によって陸との距離が推測できるのである。また朝は陸から海、夕刻は海から陸に飛ぶ鳥ならば、時刻によって陸（島）の方角を示すからである。

このように鳥を航海の指標とするカロリンがカヌーの船首ないし船尾はグンカンドリをイメージして作られる（写真 3）。またタクウやヌクマヌの古いタイプの航海カヌーは鳥の嘴を模して作られる。トロブリアンドでもカヌーは鳥の装飾がなされるが、厳しい鳥食のタブーは鳥と人間との同一化に由来する（Feinberg 1988: 110-111）。帆柱に止まる鳥は行く手を教える導きの神であり、帆柱の先端に鳥のような装飾がなされるのはそのためである。

これとの比較で思い出されるのは『おもろさうし』13 巻（967）にある次の歌である：

奥渡　舞う　鬼鷲／ つゝが上　使い／　吾　守て／　此の渡／　渡しよわれ

（沖の海を舞う立派な鷲は、つつの上、せひの上を舞う神のお使いだ。我々を守ってこの海を渡し

たまえ）（外間 2000: 128）

鬼鷲とは立派な鷲、つゝとは船の帆柱せひとは帆をあげる滑車を意味する。帆柱は船霊を納める場所でもあり、船霊と鷲とが何らかの対応を持っていたことが伺われる。

2.3. 反り返る舳先

上記以外にもそりあがった舳先、いわゆるゴンドラ型の船も珍しくない。ソロモン諸島のモン型カヌーのようにオセアニアに珍しくアウトリガーを持たない船はその典型だが（写真 4）、それが台湾タオ族（蘭嶼島）のチヌリクランに類似しているのは古くから指摘されている。モン型カヌーには黒光りする船体の舳先と艫の両側に螺鈿細工が施される点で装飾性が高い。そして西部（ニュージョージア）諸島の場合、舳先に独特の彫刻が掲げられる。この口の突き出た顔は一説では鰐、一説では鳥をイメージしていると言うが、いずれにせよ人間と海に関連するいくつかの動物の融合体であると考えられる（Davenport 1990）。

マヌス島のあるアドミラルティー諸島では螺旋状に反り返った取っ手を持った木椀が有名であるが、その西に浮かぶパラ・ミクロネシアのエルミット諸島では、舳先と艫が同様に螺旋状に立ち上がった大型カヌーがある（後藤 2009）。現在実物はベルリンの民族学博物館に展示されている（Parkinson 1999）。このカヌーは首長が交易を行うためのカヌーである。船体には全身入れ墨といっていいほど装飾が稠密に描かれている。空隙への恐怖とも感じられる。アウトリガーの腕木の尖端もおそらく蛇を模して彫刻してある。このシダ植物を模した空隙ような舳先は大地から萌え出る生命力をも象徴したのではないかと推測する。

ビスマルク諸島のニューブリテン島、とくにその東端ガゼル半島の沖に浮かぶワトム島付近で造られるカヌーの舳先も特徴的にそりあがっている（写真 5）。これはカブト虫の角を表すようで（Stephen 1907）、やはりカブト虫のような力強く後ずさりしない性格をカヌーに込めた物と思われる。

ニュージーランド・マオリ族の間では各氏族が戦闘用カヌーをもっている。それぞれが名前を持ち、ほとんどが女性であるとされる。舳先飾りは通常のカヌーより豪華に装飾され、島に最初に到達した祖先に由来する（Nelson 1971: 35）。反り上がったカヌーの舳先装飾に見られる渦巻き文は光と知識が地上に出現する様を象徴している（写真 6）。渦巻きがしばしば分離しているのは水平版の地母神パパと上の天空神ランギを意味している。二人の堅い抱擁から神々が生まれ、それを無理やり切り離したことによって天地が分かれたとされるマオリの神話が背景にある。

反り上がった舳先の基部に寝ているのは地母神パパで、その下に死の神であるが部分的に鯨の形で表されている。戦闘用のカヌーは死と関係するので、これは最初に殺された人間カエ（Kae）と関係する。舳先の先端には三つの像が一列になっている。最初に人間と戦争の神が振り返って創世神タンガロア神に戦闘の踊りのように舌を出して警告をしている。中央の渦巻きの中に彫られたのはタネ神であり、そのわきにカヌーをのぞき込むように風の神がいる（Nelson 1991: 45-46）。

3. 考察

カヌーの装飾に使われる動物はまず海や水に関係する動物である。たとえばグンカン鳥のような海鳥である。また鰐は水生動物であり、またその性質より武力の象徴あるいは創世神話との関係（水界の王）という点で理解できる。一方水界の動物でない場合は蝶のように飛ぶことを意識、あるいはカブトムシや鶏のようになんらかのパワーを意味する呪術的な思考が関連する。これらはすべてカヌー

自体に動物の持っている力や性質を乗り移らせるような意味がある点で共通しているだろう。一方ブタの頭が舳先に彫られた交易用カヌーは、交易の対象であるブタに関する祈りである点で異なるだろう（Barlow and Lipset 1997）。

さてカヌーは用途や目的および伝統的なスタイルにそって形態や構造が決められる。そしてその上で宗教や象徴観念にそって装飾がなされるようにも思われる。しかし人々はまずカヌーを作り、その上でその形態に併せて装飾をするのだろうか？むしろカヌーそれ自体を装飾がなされるキャンバスと見られないだろうか。つまりカヌーであるために必然的な形態や構造があるはずだが、そのカヌーや船自体が何かを想起させ装飾の「キャンバス」となるのではないかという問題提起である。

たとえば船の船体は細くてとがっていて、水に浮くなど共通の物質的性格を持つ必要があろう。しかし同時にその舳先と艫がそり上がり、全体が細身の姿が、たとえば鰐とか蛇あるいは魚などのイメージを喚起させるのではないだろうか。しかし魚の場合、ふぐとか底魚ではなく、トビウオとか鰹とかカジキとか、海を駆けるような魚を連想させるのではないだろうか。あるいは鳥の場合ダチョウとかインコではなく、外洋を飛ぶグンカン鳥やカモメを連想させるのではないか（写真２）。その意味連関の背景にはもちろん形態だけではなく海の上にいるという生態、あるいは海を駆ける、遠くへ導くなどの願望や信仰が存在するわけである。例えば写真７はポリネシア・マルケサス諸島のカヌー（模型）であるが、カヌーを造ってから装飾が施されたというより、カヌーやパドル全体がもともと細長く、それがヒレを持った蛇や龍の想起させる形態であることが装飾の出発点ではなかったかと思われるのである（Steinen 1928）。

さらに幾何学的な類似性あるいは相似性によって類似の装飾ということもありえるのではないかと思われる（後藤　2009）。たとえば中空の長い形態はカヌー、割れ目太鼓、木椀、骨壺などと相似性を持つ。あるいは長くて一端が太くなっている形態はパドルや棍棒に共通するだろう。そのような幾何学的共通性を持つ物質文化に見られる共通の意匠の存在である。それは相似的な形態が何らかの共通のイメージを想起させるからではないだろうか。前稿で論じたように魂の器としての船という表象の形勢要因の一端もそこにあるのはないか（Vroklage 1936 ; 後藤 2008, 2009）。

パーキンソンは船の船体の螺旋状の装飾と木椀のそれが同じ finola と呼ばれる模様のカテゴリーであることを指摘している。造っている先住民自身がカヌーとそれ以外の物質文化の装飾に類縁性を認識しているということである（Parkinson 1999: 195）。このような現象は「原型」的な思考のような、人間の深層心理と関係する側面もあるであろう。

おわりに

日常的に接しない地域を尋ねる、あるいは日常的に接しない集団と出会うために移動をすることを旅と定義できよう。日常的に接しないとは距離的な意味だけではなく、近隣にあっても滅多に立ち入らない空間に行く場合にも適用できるであろう。したがって旅で出会う集団は程度の差はあれ異文化集団あるいは異言語集団として理解できる。旅が旅行として制度化あるいは商業化される以前では、交易のような活動も旅の範疇にはいるであろう。さらに異集団との戦争のための遠征も同様である。

カルチュラル・スタディーズの旗手ポール・ギルロイは『ブラック・アトランティック：近代性と二重意識』の中で大西洋をはさんで成立してきた「ブラック・カルチャー」は度重なる旅の結果であると論ずる。彼は言う「船のイメージは、生きた、ミクロ文化的でミクロ政治的な動態的システム」である（2006: 15）。そして「船は、大西洋世界におけるいくつもの点を結合する生きた手段であった・・・船は、それがつなぐ固定した場所の間を移動する空間を表す動的な要素だった。したがって

船を、三角貿易を抽象的に実体化したものというよりは、文化的で政治的な単位として考える必要がある」(2006: 38)。

このように船は単なる移動手段ではなく様々なレベルにおけるシンボルという位置づけができる。本稿で民族事例の中心としてきたメラネシアでは交易は無計画に行われるのではなく、たいていは決まったパートナーとの間で行われるのである。パートナーが死んだらその権利は子供に譲られ関係は継続していく。無論、新しい相手を開発することは普通に行われるが、少なくとも一定期間はその相手と恒常的な交易関係を結ぶのである。

交易に出かけるときには有利に運ぶように質のよい品物を持って行くのは当然であるが、男たちは相手が自分に惚れ込むように種々の化粧をする。顔や体に染料を塗ったり、豪華な貝の飾りを身につけ、さらに相手が納得するような呪術を唱える。さらに交易には性的な隠喩もあった。つまり交易に出かけることは相手の部族の女性を誘惑しにいくことであると。交易に出かける男はパートナーの親族に逢い引きする相手がいるものだと語られるのである（Barlow and Lipset 1997: 24)。

交易あるいは「旅」とはこちらの全存在をかけて異性あるいは異文化を魅了する行為だったのである。そのために船も旅化粧するのである。

本論は南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 および人文学部研究費（特別配分）による研究成果を含む。

引用文献

Barlow, Kathelen and David Lipset

1997 Dialogics of material culture: male and female in Murik outrigger canoes. *American Ethnologist* 24(1): 4-36.

Bühler, Alfred

1961 Kultkrokodile vom Korewori. *Zeitschrift für Ethnologie* 86: 183-207.

Davenport, William

1990 The canoes of Santa Ana and Santa Caralina Islands: Eastern Solomon Islands. In: D. Eban (ed.), *Art as a Means of Communication in Pre-Literate Societies*, pp. 97-125. The Israel Museum, Jersalem.

Feinberg, Richard

1988 *Polynesian Seafaring and Navigation : Ocean Travel in Anutan Culture and Society.* The Kent State University Press, Kent

ギルロイ、ポール

2006 『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識』、月曜社。

後藤　明

2008 「海彼世界への旅：オーストロネシア（南島）語族における死者の島の諸相」『万葉古代学研究所年報』6:229-238.

2009 「オセアニア航海民の魂の器としてのカヌー」『アジア遊学』128:136-147.

後藤　明・石村　智

印刷中「ショーテン諸島のアウトリガーカヌー：南山大学人類学博物館および沖縄海洋博公園海洋文化館の資料紹介」『南山大学人類学博物館紀要』29。

Hogbin, Ian H.

1935 Trading expedition in northern New Guinea. *Oceania* 5: 375-340.

外間守善

2000 『おもろさうし』、岩波文庫。

西村真次

1936 『萬葉集の文化史的研究』、東京堂。

Nelson, Anne

1991 *Nga Waka Maori: Marori Canoes.* Macmillan, Auckland.

Newton, Douglas

1971 Crocodile and Cassowary: *Religious Art of the Upper Sepik River, New Guinea.* The Museum of Primitive Art, New York.

Parkinson, R.

1999 *Thirty Years in the South Seas.* Crawford House Publishing, Bathurst.

Steinen, von den Karl

1928 *Dir Marquesaner und Ihre Kunst.* Dietrich Reimer, Berlin.

Stephen, Emil

1907 *Südseekunst.* Dietrich Reimer, Berlin.

Vroklage, B.A.G. von

1936 Das Schiff in den Megalithkulturen Südostasiens und der Südsee. *Anthropos* 31: 712-757.

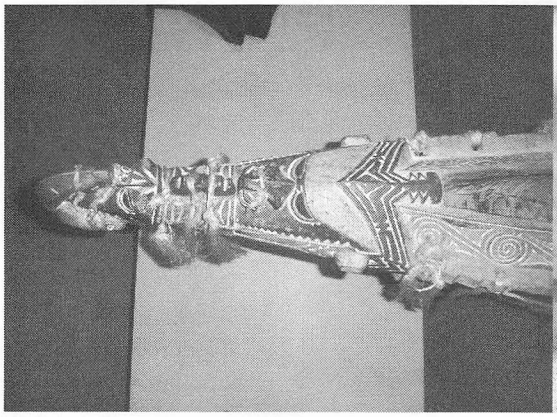

写真１　ニューギニア・ショーテン諸島
カヌーの鰐型舳先（海洋文化館）

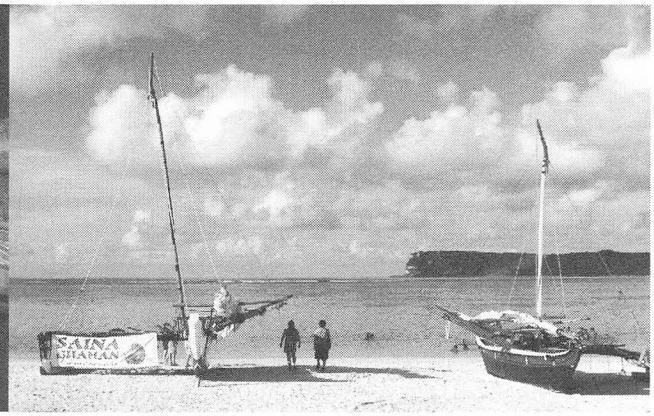

写真２　ミクロネシアの航海カヌー
（左が復元チャモロ型、右が西カロリン型）

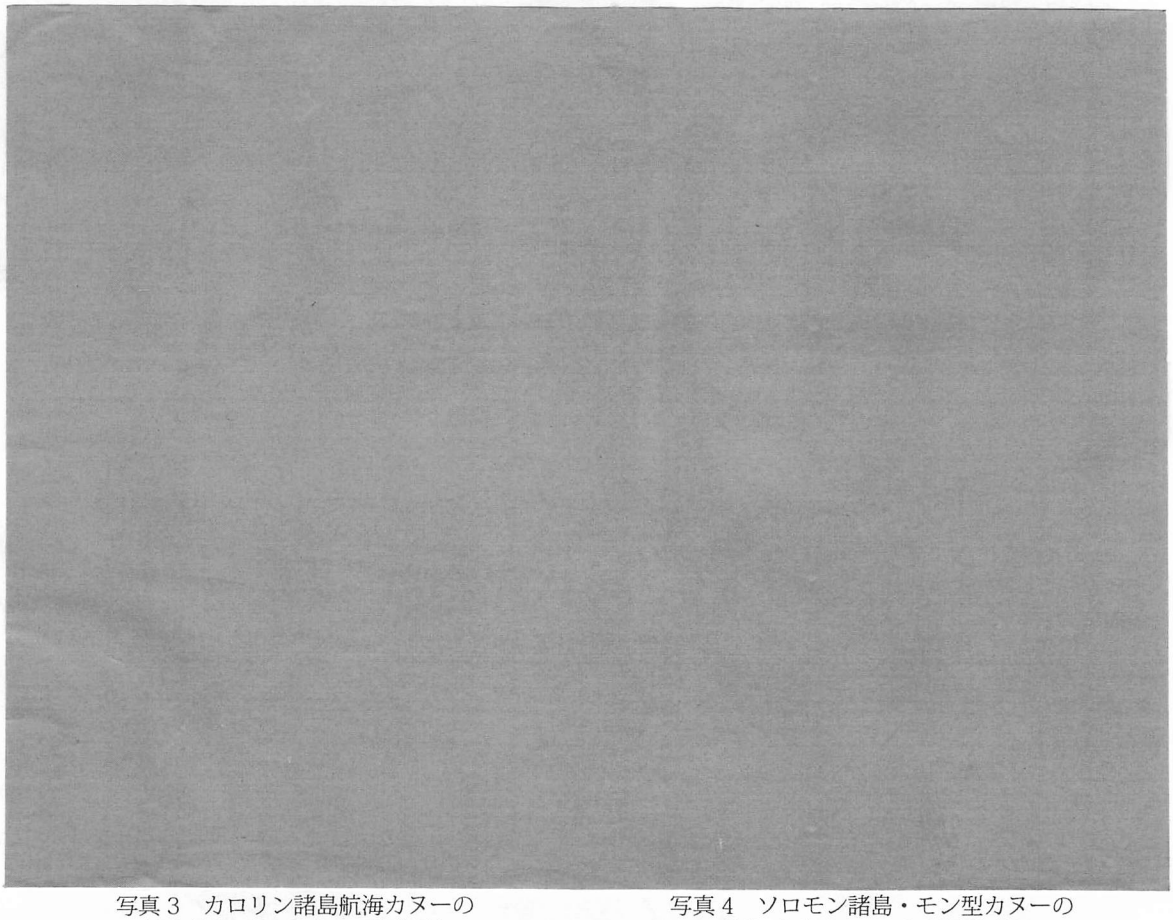

写真３　カロリン諸島航海カヌーの
舳先装飾（ライプチヒ博物館）

写真４　ソロモン諸島・モン型カヌーの
舳先（ブレーメン海外博物館）

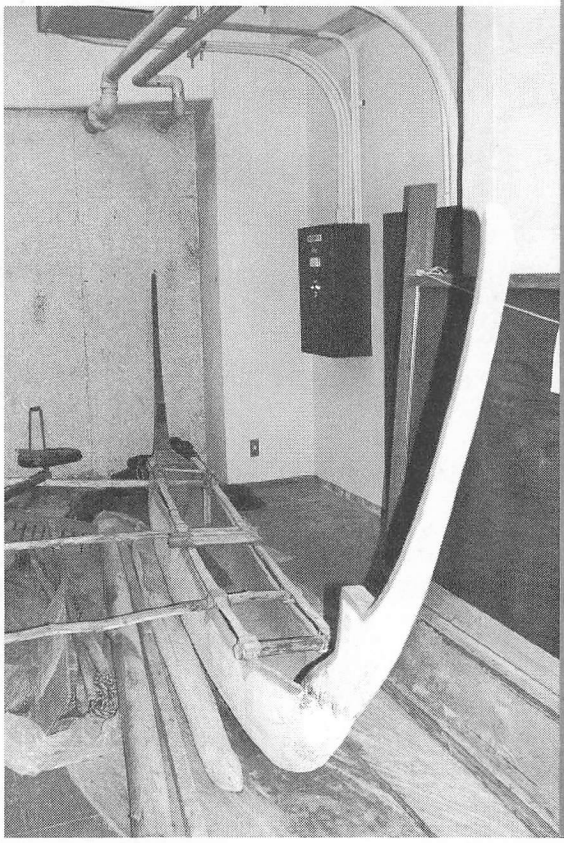

写真５　ビスマルク諸島ワトム島付近の
カヌー（海洋文化館）

写真６　ニュージーランド・マリオ族の
戦闘用カヌー（オークランド博物館）

写真７　マルケサス諸島のカヌー模型（von Steinen 1928 より）